

まえがき

風が何かを運んでくる。

遠くの街に、さびれた街に、華やかな街に。

ビルの谷間をかいくぐり、木々をざわめかせながら、求める相手を探すがごとくに。

そして、風は人々の耳元で何かをささやく。

それは、風が運んできた魂たちの消息。

今夜も風は魂たちの叫びを伝える。

あなたにも聞こえないだろうか、この風の音色が。

それは、街の明かりと喧騒うらやの中で、忘れ去られようとしている魂たちの叫び声なのか。

その声は、耳を傾けてくれる者を求めて、人々が集う場所まで運ばれてきたのだ。

黄泉よみから吹き上げる風に乗って――。

この本は、そんな風に乗って伝えられてきた話を蒐集しゅうしゅうした一冊である。

最後の会話

Mさんのお店は、詰めて六人がやっと座れるカウンター席とテーブル席が二卓あるのみの、見るからに大衆中華と呼ぶにふさわしい白地に赤い中華雷紋らいもんと店名の入った暖簾のれんが目印の、小さなお店だ。

しかし、お昼ともなると表に行列のできる地元の人気店となる。安くてうまいと評判のラーメンと炒飯が、この人気メニュー。

人を呼び込む人気の料理を厨房に立って作っているのが、奥さんのT美さんである。

このお店はMさんとそんなT美さんの二人三脚で続けてきた。

MさんとT美さんの年齢差は十五歳。Mさんが四十歳、T美さんが二十五歳の時に、お見合いで結婚した年の差カップルだ。四十歳になっても独身だったMさんを心配していた商店街の人達も、この結婚を大いに祝福してくれた。共に初婚であった。

出前はMさんがバイクで行ない、その間はオーダーから調理、配膳をT美さんが一人でこな

す。昼営業が終わってからの三時間の休憩以外、夜九時の閉店までT美さんはずっと立ちっぱなしとなる。

小柄ながら頑張り屋のT美さんだったが、やはり五十歳を過ぎてからの立ち仕事は体に負担がかかった。若い頃にはなかった膝や腰の痛みが、T美さんを苦しめた。

商店街の仲間たちは、そんなT美さんに「少し休んだら？」と言ってくれたが、T美さんは「お父さんが大変だから」と言っただけのまま厨房に立ち続けた。

その夜も、いつもと同じように閉店後の店掃除が終わり、それぞれが別々に入浴をすませた。Mさんは、仕事が終わってから一人お店でビールを飲むのが毎日の楽しみだった。その日、Mさんはなぜか酒が進み、瓶ビールを二本空けていた。気がついた時には、時間はもう午前二時をまわっていたという。

Mさんは、お店に繋がっている一階の畳の間で寝るのが常だった。Mさんが六十歳を過ぎて、二人にはもう男女の関係はなく、T美さんは静かに眠れるという理由で、一人息子のKくんが大学に入ってから空いていた二階の部屋で寝ていた。

「もう二時か、そろそろ寝ない」と

と、Mさんがひとりごとを言ったタイミングで、二階からT美さんの声が聞こえてきた。

「お父さん、こっちに来て……」

普段は、そんなことを言ってくることもなかったT美さんだったので、それがMさんにはちよつと意外な気がしたのと同時に、こんな時間にまだ起きていたのか、という心配が脳裏をよぎった。

「お前、こんな時間にまだ起きていたのか、明日も早いんだし……」

Mさんは、そう言いながら階段を上がっていった。

二階の六畳の部屋では、布団を敷いてT美さんが床に入っている。

T美さんが小さな声でこう言った。

「お父さん、キスして……」

いきなりのことにMさんは動揺した。普段なら「バカなことを言うな」と照れながらしかるところだったが、その夜はなぜか素直になれた。

そして、仰向けに寝たままのT美さんの口元と頬に優しく口づけをした。T美さんの頬は暖かかった。

その瞬間、Mさんは自分たちが今よりも若かった時のことを思い出した。

「T美、こんなことひさしぶりだな。ちよつと昔を思い出しちゃったよ」

「お父さん、照れてるの？」

「い、いや、違うよ。なんだか、俺も歳を取ってしまったなあ、って思ってたさあ……」

「そんなことないわ、お父さんはずっと昔のままよ。ただ、昔のお父さんは毎日わたしにチュ―をしてくれていたけどね」

とって、T美さんは優しく笑った。Mさんもつられて笑った。そして、布団の中に入っていた。

「……T美、俺はもういい年齢だ。それに比べてお前はまだ若い。……あのな、もし俺が先に逝ったとしたら、後の人生はお前の自由にしていいんだぞ」

そんな言葉がずっとMさんの口から出た。

これは実は、Mさんが普段から考えていたことだった。本心から、自分が死んだらT美さんにはためらわず再婚してほしいと願っていた。

「なあT美、あの……。俺みたいな親爺にお前のような若い女房が付いてくれていて、本当にありがたいって感謝しているよ」

無骨な調子でMさんがこう言った。

結婚して三十年経つのに今までこんなことを口に出したことは一度だってなかった。

「お父さんは、まだまだ若いわ。バイクだって三十年以上無事故なんだし、運動神経だって若い人には負けないと思うわよ。出前の時にね、バイクに乗るお父さんの後ろ姿を見送るのが好

きだったわ」

Mさんは、布団の中でT美さんを抱きしめながら、

「T美、ありがとう、すまなかつた……」

と、何度も口にした。そして、再びT美さんを強く抱擁した。

朝が来て、布団から身を起こしたMさんだったが、一緒に寝ているT美さんが一向に起きな
5。

「おう、T美……」

声をかけて、体を軽く揺さぶってみた。

その瞬間、Mさんがあつと声をあげた。

昨夜まで一緒に寝ていたT美さんの体が冷たくなっている。

顔色が真っ白になり、呼吸をはじめ一切の動きを止めてしまったT美さんの体がそこにあっ
た。

「T美、T美！ 起きてくれ、起きてくれよ！ T美!!」

Mさんの悲痛な叫び声が部屋中に轟いた。

救急車が呼ばれ、T美さんは病院へと搬送された。しかしT美さんは帰らぬ人となってしま

った。

医者の話では、T美さんは寝ている間にも腹下出血が起き、眠ったままの状態で亡くなっ
たということだった。

「ただね、おかしいことがあるんですよ。医者が言うには、T美が亡くなったのは、体の状態
から見て、床に就いた午後十一時過ぎだっていうんですよ。つまりは、眠りに入ってすぐに亡
くなったってことになる。

しかし、そんなことはないですよ、絶対に。だって俺は午前二時過ぎにT美に呼ばれて二階
へ上がって行ったんですよ。

少なくともその時間までは彼女は生きていたはずなんです。しかし、医者は強く否定する。
そんなことってありますかね。

医学的にはありえないとか医者は言っていましたけど、俺は少なくともT美が死亡していた
はずの時刻に、彼女と話すことができたんです。あの時間は夢や幻じゃなかったって、今でも
思っています」

Mさんは、今でも一人で厨房に立ち、中華鍋を振っている。

そして、T美さんの味に近づけるよう努力しているという。